

桂花（きんもくせい）の薫りが秋の空に漂う十月、中国に朗報が届きました。莫言氏が、今年のノーベル文学賞を受賞し、中国が待ちに待った夢が実現したのです。中国共産党内序列五位で思想宣伝担当の李長春政治局常務委員は、十二日、莫言氏受賞は「我が国の総合的な国力と国際的な影響力の高まりを体現した」と評価しました。中国のメディアは莫言氏受賞を一斉に速報し、中国全土で歓声が沸きあがりました。そして、私は喜ぶ者とともに喜びました。でも、二年前、劉曉波氏の受賞に対しては、文革式の激しい言葉で非難し、授賞式出席も妨害しました。あまりの差で、そのダブルスタンダードに驚愕します。そして、ネットでは、莫言氏が、十月十二日、地元の山東省における記者会見で、「（劉曉波氏の）一刻も早い自由の回復を望む」と発言しましたが、中国のメディアはこれらの発言を全く報道していません。インターネットにアップされるたびに削除され、中国式ミニブログのウェイボーで転載されてもことごとく削除されました。

振り返れば、二〇〇九年十二月二三日、劉曉波氏は「私は中国の連綿として絶えることのなかった文字獄の最後の被害者となり、これからは誰も言論のために罪を着せられることのない社会が実現されることを期待する」と、直筆の最終弁論（私には敵はいない）で陳述しました。しかし、彼は「最後の被害者」とならず、むしろ、言論統制はますます強化されています。そのため、作家の余傑氏、中国社会科学院哲学研究所の張博樹博士、作家の廖亦武氏たち自由を求める知識人は海外への亡命を強いられる一方、国内では投獄される者が絶えません。ウェイボーのつぶやきだけで投獄される者が次々に出ています。

これらは漢人の場合ですから、マイノリティに関しは推して知るべしです。

実際、チベット人作家のグドゥップは、十月四日、チベット自治区ナクチュ（那曲）の街頭で、中国政府に抗議して焼身自殺しました。目撃者によれば、彼は炎に包まれながら「我々はどこに行こうと自由がない、チベットに自由を！ダライ・ラマ法王のチベット帰還を！」と叫び、その場で死去しました。チベット人の抗議焼身自殺は二〇〇九年から数えて六〇名以上になっています。

また、チベット女流作家オーセルさんは、国内で禁じられたため国外で出版し、それが評価されて国際的な賞をいくつも受賞しても、パスポートを取得できないために授賞式に出られません。パスポートを繰り返し申請しても受理されないのです。しかも、中国共産党第十八回大会を前にして、彼女は夫の王力雄氏とともに強制的に北京から退去させられました。

文学の本旨は、様々なレトリックで飾られた仮面を剥ぎ取り、現に存在する生身の人生を描き出すことで、内心の根源からの再生をもたらすことにあるとすれば、ノーベル文学賞の発する強烈な輝きに目を奪われず、自由を求めて悪戦苦闘し、それも報われずに影でうめき、歯ぎしりし、嗚咽している姿にも注目し、その声に耳を澄ますことが、文学には必要なのではないのでしょうか。

そして、悲しむ者とともに悲しみつつ、オーセル著、拙編訳解説『チベットの秘密』出版記念会のご案内をいたします。いつも日中の間にあってマージナルで孤立無援の私を支えてくださるみなさまに感謝を込めて。敬具。劉燕子  
11/16（金）「チベットの秘密」出版記念講演会@大阪  
[http://blogs.yahoo.co.jp/electric\\_cat2003/63004558.html](http://blogs.yahoo.co.jp/electric_cat2003/63004558.html)  
受付サイト <http://kokucheese.com/event/index/58721/>